



らく疑へて教明を極め決りあるべしとされれば
体として古来も教れり泥濘のやまごとくそまれば
重なることありまじき今世は作と泥濘の皮の作
えくる今としてこれらもいふやうに
肉の内におもひの心臓を但心臓意れ者新よ
らく識之識は物と委細なる物とて泥文
よの識の如くとはせり又情の字もこれなり
云情乃字の識のころと云ふは時々のころと云
比よめぐと性と草木は禽獣はあざとらるるもの

純くしてとされれば肉は決りてとてとて
けりてとてとてとてとてとてとてとてとて
姿の如くは是又あやまるともされれば
とてとてとてとてとてとてとてとてとて
骨の海とてとてとてとてとてとてとてとて
心は心は心は心は心は心は心は心は心は心は
塵埃とてとてとてとてとてとてとてとてとて
ぬけて行願は定してとてとてとてとてとてとて
ころとてとてとてとてとてとてとてとてとて

此道の秘のり

○係の糸を白打して付多く染めおろすは白く染むるに
てうして中より染めおろすは白く染むるに

おしりの糸の長と書かす

色歌 ながさの糸がちる糸を白く染むるに

同様の境と分る糸を白く染むるに

雑語 △糸の長と分る糸を白く染むるに 其角

○随におろすは白く染めおろすは白く染むるに
ちるに白く染めおろすは白く染むるに

おしりの糸を白く染めおろすは白く染むるに

おしりの糸を白く染めおろすは白く染むるに

色歌 ながさの糸がちる糸を白く染むるに 紹巴

おしりの糸を白く染めおろすは白く染むるに

雑語 △糸の長と分る糸を白く染むるに 三巴

○係の糸を白打して付多く染めおろすは白く染むるに
てうして中より染めおろすは白く染むるに

おしりの糸を白く染めおろすは白く染むるに

いふはらとせむのさめくしゆれびふれ人と北^{チカ}なる
公詞人のさよとらひきしるまてあるぐー

又云

○都とてはとれ海島の深き

宗初

○ふとて都守統の深き

智盛

此の月トは合ゆしとまよふ人ねんとた^{ツカ}と
傍者よゆ〜○^{ニヤサシ}を志ざりかりが〜と別約要
の事あるぐ〜と能借よ多くつら〜と但當
何と類多〜と能借よ能借よ能借と
い〜とがぶの人よ〜と能借よ能借よ能借よ

う〜と人のこの中〜と〜と〜と〜と

む〜と能借の梅とよた

え〜とやい〜とは〜とよた

ま〜とて天とれ〜とよた

若月と天とれ〜とひら

笑の者よ〜と〜とよた

花の白〜とた〜とよた

あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
又云 ○た〜とた〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

〇五むいきういんめあめり

是あつ知いほりともども出所各別之味イテトキは
氣入とぬお焼の氣入とあづこがごとく形と名と
いふれども出所いりりて公うりて又頼戸焼の摺紙
と同れ香炉きざりつるべし是あつ名と形と名
別乃おあれど出所焼するあひむとつて此類と徳
分別つるべしとて詠歌大概しと求テ入素詠と徳之と
此詞道の所公之凡和考と詠ぜんとする所の道あつは
よ向て乃成りて先及ぬ境よのぞとて新し風情と

詠ぜんとあつぬまぞとらうとくさこ能借とてんめく
つと〜但け求テ入素詠と詠之とらふ美はつと〜き
つと詠ぜんとら義よつと〜世の中つ物と何ト
知じつと類と何あつと月苑なつとむと吾人の心と
らづりて〜つと〜詠ぜんよとの義と

いふと〜つと〜の義と相うよとの限りあける 詠人義
いふと〜つと〜の心とえよとらうと月苑の義 定義
是あつ〜つと〜つと〜其らゆつと〜
給あつ〜つと〜年あつとと年あつと

しのきかむよ不答とびおきまぐらうとくし悪人こそ
 おれ類のあらん人の今あめを述べすも見らうらうと
 事し但又今時の能潜とくよ多分古きあるごと
 作者よももむれらて回ひゆるにてもよ自はるのが
 あらぬ作者をうらとてさふおれはひとさうりあう
 どのれがさひとる初と付ゆるの自はるあうでやうら
 五文字と序入もう一七文字とよくあけあう
 人は作とあうとて是は授て又あうとてま意
 味は尋たよ只字一貫し用信とさうら海とてか

やうとくもむと作とくさ一字のよとてあうと
 なるぬやうに練けて自回自答と格めぬ人よと潜る也
 それよ其のとえとてさうらぬとてあうとて胸
 中よあうとてさうらぬとてあうとてさうらぬとて

(生) 連歌能潜の痾病と事

一
 二 爛蝶病 四 渚 鴻 病 五 花 樗 病 六 老 楓 病 七 中 飽 病
 八 後 悔 病 巳 上 八 病 又 一 岸 樹 病 二 風 烛 病 三 浪 船 病
 一

折れ花を〜 ちりちりの〜 ちりちり〜 とゆふ〜
そ然と〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
と〜 と〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
仍見〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
然〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
こ〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
ちりちり〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
是〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
ちりちり〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜

〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
道場ミチノのちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
か〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
然フツカと風雅フツカのちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
合アヒちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
向ムカちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
彼道カノミチちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
同ドウのちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜
ゆ〜 ちりちり〜 ちりちり〜 とゆふ〜

是月の奇なる所を記す月の一の事

是等十七首の中より末母紀五十首よりを述

はれ池心りしを公に於て其の如くして

心する奇しむらぬくしつらき

軍方陣之連続継踏よむらるる

付多白と伝ふる事

継踏よ 待くして浅黄梅の懸かり

きくしむらぬまの如し

⑩ 末母紀之事

○ 奇なる末母紀としてつらき

此折なりしよあしゆらいつら

卿佐末母紀周而中一吟十七

よ書きあつる物にらるる

約きて自らしゆりし

してあつる物にらるる

く作りし物に宗初是といふ

の長白れりしきとを物結し

二種を三つしむらぬ

紀と云ふものありては其の末母紀とい

佛がなせしむるにひまらふん

二月に末母紀といふと果して

佛の世にまづしむるにんまんとあるよしは人の

かたじけなくもけしむるのしりては是末母紀と

わかれ後より大切の紀の末母紀といふ

○初まればはくましくきこふとて

まのゆきもわらふ人けりあづけりては浦安とて

一と末母紀といふはこれ又心教僧都は末母紀

とて実りあるはこれなり

○うして世よりあつてはくまは

○ある知るとゆゆしくはあつた

○かゝるにんまの好の月夜に

是より類の白詰末母紀といふはこれ佛借といふては

連歌の面中吟の末母紀といふはこれのうらむとてしりて

とよふても敬ふ別てきくゆりて佛借といふ好む

用ふゆき多しといふはこれ宗孫云連歌士の佛借といふ

ねむるものも佛借といふは利口をきくはこれの

さて是し袂風の袖うさそとらへおと後申しお
るあるより通るぬこ紙借しぬら

うらまゝかまよおと女のしらくともうんとて
▲うらまゝかまよおと女のしらくともうんとて

是女まよと申しうらまゝかまよおと女のしらくともうんとて
うらまゝかまよおと女のしらくともうんとて
中しうらまゝかまよおと女のしらくともうんとて
おらまゝかまよおと女のしらくともうんとて
うらまゝかまよおと女のしらくともうんとて

うらまゝかまよおと女のしらくともうんとて
通ふらうらまゝかまよおと女のしらくともうんとて
うらまゝかまよおと女のしらくともうんとて
うらまゝかまよおと女のしらくともうんとて

世首切之事

○首切と云ふは文字よりた文字のつらむと云ふ連なりおと女まよ
○女まよの浅茅が原の甲しつて
此の女まよの浅茅が原の甲しつて
○女まよの浅茅が原の甲しつて

五七五 五七五 五七五

と云付は五七五並に續してよと云 此指しよりくはどく
▲かうどくきうめいけいり 麻射者業

是うらむきうめいけいり 是ちの一字して七文字
並に續するはりきうめいけいり 麻射者業と云はれ

④ 昔冠多と云り

○冠多と云りといはれ五文字に白は用は不立し
○まゝあはれぬ袖はうらむ

うらむと云りぬ袖はうらむと云はれしは五文字の
白は用は不立あはれぬ袖はうらむと云はれ

▲ぶがらす書のはり 此作の書

乃類之書のはり 此作の書は作しゆらぶが
らと云りぬ袖はうらむと云はれしは五文字の

⑤ 袴着と云り

○是の上の五文字下は五文字の縁ありて中は七文字用はまゝ
○家宿と男麻はくしんまゝにて

あぐら類のや 家宿と云はれしは五文字の縁ありて
どの中男麻はくしんまゝにて縁ありて又能指はらむ

▲まぶすはらむのり 此作の書

あつて類しむる類は文付の縁まで中のあきのがらを用はず

○**六** 出づるべきもの

○是の五文字七文字の縁を續けて下れ五文字用はまよふこと
○故卿とあるまづて人の中は恥

あつて下れ五文字用はまよふこと
▲位者やうのちのてと玉子居

とてまづ下れ五文字用はまよふこと
歌への縁とともとする名前のごとくは類はまよふこと
此指への縁と連續しては古の面白くしてつるぬぞ

とて初めつるごとくは初め終りのこととてえられぬ

ゆゑにあらそはれぬものもあつてはつてのまよふこと

○**七** 籍への初と云ふ

○ひきの連続ひきの籍とてはつてのまよふこと
道具の等と多きあつてはつての初めつること

くまのつてはつてのまよふこと

○類のつてはつてのまよふこと

も歌の類よりえらふこと
つてはつてのまよふこと

此歌と云と我能辨結して云う

雨はあつちの瓦をくことと云あつち

林はあつちの鶉をく柳のうら

是等なるべし草白とぬ草白にて付くるは林
と云ふ鶉と云ふこととあるはうらう縁を柳のうらぬ
是ひもくはうらうとて二百はうらうとて用あ
たぬ道具類と多く云人々の道はうらうとてあらず
物のみ多くなく物にあつち魂と云は付ぬあつち

此四の付とて場なり

○此四の付と云のうらう付物と專とせし時ありと
け辨ありし今れ能辨とすれあつちとて歌うと云

うらうとてえや林はかたは

○日らうらうの勢やとて

是してあつちの柳は木なまのうらうとて
不辨の能辨はうらうとてあつちとて

此九の成付之書

○此歌うらう能辨うらう成付と云る但能辨は今
ぬ此成と云うとて場と場ぬきとてあつちと

白なる成子乃世のゆとらてくぐり合ぬ

△臨みぬ草履らるるきあはる

付ゆらあ白よりくつらぶおひこ是あめらて付を
白依等の依者れてくぐりあはるる

⑤五音も續つる

此のよくくさくまぐりしは夜あまの夜らあまの
縁とと弟とくまぐりしは夜あまの夜らあまの
時い五音れあくとくぐりしは夜あまの夜らあまの

△五七五の縁切るる

かといひと申すはしめぬ言のふらりとあはるとあまの
越て五七五の縁切るる
時くの時くよ五音と通じしは夜あまの夜らあまの
五七五の縁とくまぐりしは夜あまの夜らあまの
の飛指まぐりしは夜あまの夜らあまの
あはるとのうひらくまぐりしは夜あまの夜らあまの
とらる時と歌と相伏すは夜あまの夜らあまの
よまぐりしは夜あまの夜らあまの
茶の病人の縁まぐりしは夜あまの夜らあまの

てい地下の者は、
のさるさる〜
まはらり燃焼して、
し海つ道は、
志ぬるさる〜

① 又勇と録〜

わらけらるるの類、
也排階して、
わらけらるるの類、
也排階して、

食られぬ、
これら、
や〜
都て、
但排階、
茶の、
あて、
高〜

ついでに... 欲地指と...
己又の假名...
本會歎...
か...
一...
う...
ら...
は...
天明と明石の浦の胡弓は徳隠しリク船と... 思

休め字

○... 天明明石... 休め字...
の...
て...
名...
と...
ハ...
の...
と...
道...
人...
介...
は...

休め字

一 松をいへばはるかにくぬの草
 ト しのをいへばはるかにくぬの草
 ね のをいへばはるかにくぬの草
 ぶ のをいへばはるかにくぬの草
 っ のをいへばはるかにくぬの草
 ろ のをいへばはるかにくぬの草
 ろ のをいへばはるかにくぬの草
 そ のをいへばはるかにくぬの草
 の のをいへばはるかにくぬの草
 と のをいへばはるかにくぬの草

松をいへばはるかにくぬの草
 しのをいへばはるかにくぬの草
 ね のをいへばはるかにくぬの草
 ぶ のをいへばはるかにくぬの草
 っ のをいへばはるかにくぬの草
 ろ のをいへばはるかにくぬの草
 ろ のをいへばはるかにくぬの草
 そ のをいへばはるかにくぬの草
 の のをいへばはるかにくぬの草
 と のをいへばはるかにくぬの草

よ ぬをいへばはるかにくぬの草
 せ のをいへばはるかにくぬの草
 と のをいへばはるかにくぬの草
 へ のをいへばはるかにくぬの草
 け のをいへばはるかにくぬの草
 い のをいへばはるかにくぬの草
 け のをいへばはるかにくぬの草
 や のをいへばはるかにくぬの草

宗澄
 宗澄
 宗澄

能借
 宗澄

やんぢやとてあしむ首とていふや何のあしむとていふし
司中や司下や司上やまじりて皆曰ト拾やとていふはちり
此やよまるとしていふは後よまるとしていふは前よまるとして
いふは上の五文字と下の五文字とをいふは後よまるとして
いふは前の五文字とをいふは前よまるとしていふは
五文字の終よまるとしていふは初よまるとしていふは
初やらとていふは初よまるとしていふは初よまるとして
いふは初よまるとしていふは初よまるとしていふは
めく治定して上よまるとして下よまるとしていふは

あしむのあしむはあしむのあしむはあしむのあしむは
牡丹とていふは感していふは感していふは感していふは
いふは感していふは感していふは感していふは感していふは
どの類うのていふはあしむのあしむのあしむのあしむの
いふはあしむのあしむのあしむのあしむのあしむのあしむの
の類うのあしむのあしむのあしむのあしむのあしむのあしむの
出とていふはあしむのあしむのあしむのあしむのあしむのあしむの
者切や捨や疑のあしむのあしむのあしむのあしむのあしむのあしむの
の押字とていふは但拾やとていふはあしむのあしむのあしむのあしむのあしむのあしむの

110

110

ふしなごころをさしつかへしつゝもつとて
しつゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
又もつとてさしつかへしつゝもつとて
りつゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
てつゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
若二もつとてさしつかへしつゝもつとて
通つゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
のぞつゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
おれつゝもつとてさしつかへしつゝもつとて

(五六)

連袂つゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
此雨つゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
の川つゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
ひつゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
のほつゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
あつゝもつとてさしつかへしつゝもつとて
河つゝもつとてさしつかへしつゝもつとて

(五七)

とまじくもていせうしるほのむらにこもるをいふ
お袋いせいにぬり草丸はまひのこもるお袋よりけい
但し約切くとまの平ぬののこもるあつてまをいしつと
ま切ぬし又平ぬののこもる切ぬしつとまのこもる
ぬまごつとまのこもる緒後するこもるぬまごつとまのこもる
まのこもる緒後するこもるぬまごつとまのこもる

(辛) 月割る外はよあてれまあまごのぬまごつとまのこもる
是くおの切字れいふこもる

月割る外はよあてれまあまごのぬまごつとまのこもる
是くおの切字れいふこもる

(辛) 月割る外はよあてれまあまごのぬまごつとまのこもる
是くおの切字れいふこもる

⑤ 此外下知れぬ

彼はけいせいでれ又いふてい先あよとよ羽と
そいふべいらうこれ下知よかた下知と云いんかふあ
おまふ禽獣風面と外らうととと知よ射てけきより
とらひてむとらふと云いこれ切字と云いぬ
れむとととひてらひとらふと云いぬ

⑥

下知一字と畧しとめてはめくは切しと云いぬ
先あよと下知一字付て云い次の河はぐと云い
せぬお切と云いこれと是等の字にじふと云い
入垂てと云いぬと云い先あよと云いぬ
の早ぬと云いぬと云いぬと云いぬと云いぬ
畧してかゆと云いぬと云いぬと云いぬと云いぬ
思ふと云いぬと云いぬと云いぬと云いぬ
あつと云いぬと云いぬと云いぬと云いぬ
おれと云いぬと云いぬと云いぬと云いぬ

下知一字と畧しとめてはめくは切しと云いぬ
先あよと下知一字付て云い次の河はぐと云い
せぬお切と云いこれと是等の字にじふと云い
入垂てと云いぬと云い先あよと云いぬ
の早ぬと云いぬと云いぬと云いぬと云いぬ
畧してかゆと云いぬと云いぬと云いぬと云いぬ
思ふと云いぬと云いぬと云いぬと云いぬ
あつと云いぬと云いぬと云いぬと云いぬ
おれと云いぬと云いぬと云いぬと云いぬ

Handwritten text in cursive Japanese style, consisting of approximately 15 vertical columns of characters.

④

全面の切字あつて切らぬ

Handwritten text in cursive Japanese style, consisting of approximately 15 vertical columns of characters.

しつゝのまもて抱へし或る事とて抱へて
たよてあつたはるる事とて抱へし
らるる事とて抱へし疑
字下知のたじりかき事とて抱へし
と此れとて抱へし事とて抱へし
るる事とて抱へし事とて抱へし
水とて抱へし事とて抱へし
の事とて抱へし事とて抱へし
けおし事とて抱へし事とて抱へし

らるる事とて抱へし事とて抱へし
の事とて抱へし事とて抱へし

百のゆき

とあつたはるる事とて抱へし
らるる事とて抱へし事とて抱へし
あつたはるる事とて抱へし
是れらるる事とて抱へし

Handwritten text in a cursive style, likely a historical record or account. The text is written vertically on the right page of an open book. It appears to be a detailed narrative or list of events, possibly related to military or administrative matters, given the context of the adjacent page. The characters are densely packed and flow from top to bottom.

字は十二回... 海軍の... 武庫の海...
Handwritten text in a cursive style, likely a historical record or account. The text is written vertically on the left page of an open book. It appears to be a detailed narrative or list of events, possibly related to military or administrative matters, given the context of the adjacent page. The characters are densely packed and flow from top to bottom.

○解書目錄

一 解讀初手記

全錄一帖

竹亭帖

一 同曉山集

全錄二帖

方山選

一 同須日板仍如來獨日云

全錄二帖

鬼貫述

右之書有本

字自本抄由寺町同決京屋藏書

大坂小津堂前町 光利回座書部

京寺町六條上町東側 新井孫三書



